

〔病・虫害発生概況〕

〔病 害〕

昭和47年度は病害の発生状況は全般的に少発生の年であった。水稻では、7月上、中旬の集中豪雨のための浸冠水と9月以降の低温のため白葉枯病の発生が多かった。いもち病の発生は全般的に少であったが、中山間部ではレイホウに穂いもちの発生がみられた。また各地で萎縮病の発生の漸増がみられた。有明海、八代海沿海の平坦地水田地帯では、稈長、穂長が正常株に比して約10～20%短くなるわい性症状が坪状に発生し、熊本、福岡、佐賀、長崎の発生面積は約12,000 haであった。その原因については不明である。ムギでは出穂期の降雨により赤かび病がオオムギに多発した。野菜では福岡、大分の一部でスイカの緑斑モザイク病が発生した。果樹では、細菌によると思われるナシの花腐れ症の発生が福岡、大分の一部でみられた。その他の病害は全般的に平年にくらべて少または並発生であった。

稲 病 害

早期水稻では、佐賀でコシヒカリなどの品種に6月中旬頃より葉いもちの発生を認めたが初発時期は平年よりおそかった。普通期水稻では苗代期に高温か照のため軟弱徒長気味となり、6月中旬～下旬に佐賀の山間部で苗いもちの発生がみとめられた。7月上旬の本田初期は、苗による本田持ちこみと低温多雨が照のため佐賀の山間、山麓部、大分の中山間部、内陸部で葉いもちの発生がみられたがその後の天候の回復と防除により点発程度であった。穂いもちは出穂から穂揃期にかけて天気に恵まれ全般的に少発生であったが、佐賀ではコシヒカリ、ツクシバレ、もちの品種に発生し、大分では県中南部の山添地帯、県北の中山間部で発生がみられた。また一部ではレイホウにも穂いもちの発生がみられた。白葉枯病は、苗代期～7月前半の豪雨による浸冠水が多かったため、7月下旬までに各地で発生したが8月の高温多照のため一時停滞した。しかし9月以降の低温のため急激にまんえん進展し多発生となった。萎縮病はツマグロヨコバイ第2回成虫の発生がやや多く、全般的に萎縮病の発生は多であった。黄化萎縮病は本田初期に浸冠水した佐賀の山麓、大分の中

山間地帯でやや多発した。馬鹿苗病は6月上～中旬、長崎の五島、宮崎の一部で早期稲および普通期苗代で発病が目立った。褐色葉枯病は福岡、佐賀で8月下旬より山麓から平坦にかけて発病が増加し、9月中旬には葉の枯れ上りがみられ発生多であった。葉鞘網斑病は、大分で7月下旬急激にふえ8月に入りさらに増加した。その他、小粒菌核病、ごま葉枯病、イネ心枯線虫病が大分で発生した。

麦 類 病 害

赤かび病は出穂期の4月中旬に一時的に高温多湿で発病が助長され、5月上旬より各地で発生し、オオムギでは多発となり、コムギでは早生種のものほど被害が大であった。赤さび病の初発生は平年よりやや早く、佐賀では5月2日に認められた。その後多照少雨のため急激にまんえん進展し福岡、佐賀、長崎、大分、宮崎では発生が多かった。特に霜害による生育のおくれたものに発病程度が高かった。うどんこ病は、大分、宮崎では3月中旬、福岡、佐賀では4月下旬～5月上旬に発生が認められ、その後の高温により多肥田の軟弱徒長気味の地帯で多発した。

野 菜 病 害

佐賀のハウス栽培キュウリの一部に緑斑モザイク病の発生がみられた。熊本では4月にキュウリべと病が発生し、5月に入り一部のメロンにも多発した。夏秋キュウリでは、佐賀の唐津地区で立枯性疫病が多発し、宮崎ではべと病および一部で炭疽病、鹿児島ではモザイク病の発生が多かった。長崎ではプリンスメロンの苗立枯病が定植期頃に多発した。カボチャでは、宮崎で半促成および早熟栽培の収穫期頃より疫病がまんえんした。スイカでは、福岡、大分の一部で緑斑モザイク病の発生がみられた。また7月の長雨により佐賀の一部では疫病、大分では炭疽病の発生が多かった。トマトでは佐賀の三瀬、富町などの抑制トマトに青枯病の発生がみられ、これら的一部および長崎市内のハウス栽培で局部的にかいよう病が多発した。1月～2月前半に長崎のハウス栽培トマトで疫病が多発し、熊本の露地栽培では6月の梅雨で疫病が急激に進展し多発した。ピーマン

では斑点細菌病が7月中旬の台風により大分でまんえんし多発であった。また大分ではピーマンのうどんこ病、長崎では白絹病、青枯病の発生が8月に多くみられた。タマネギでは、佐賀の一部で苗立枯病が多発し、白色疫病が1月の高温により2月上旬から発生をはじめ、3月中旬と4月中旬の多雨のため福岡、佐賀、長崎で多発した。宮崎ではハクサイ、ダイコンのモザイク病、ハクサイ軟腐病の発生が多く、鹿児島では夏季にキャベツのモザイク病が局部的に多発し、7月下旬の台風後軟腐病の発生が多くみられた。佐賀の鳥栖ではアスパラガスの茎枯病が多発した。長崎ではニンジンの斑点病、1月～2月にレタスの軟腐病が並～多発生であった。またショウガ紋枯病は長崎の産地で局部的に多発生した。鹿児島では暖冬のためエンドウ褐紋病、うどんこ病の発生が多かった。イチゴうどんこ病は1月の高温多雨のため各地で多発し、3月上旬、4月上旬にさらに発病が多くなった。また福岡、佐賀ではトンネル栽培で2月上旬～5月末、露地栽培で5月中旬～6月の梅雨期に灰色かび病が多発した。ジャガイモそわか病が佐賀の一部で多発し、疫病が5月2、3半旬の高温多雨、6月の多雨のため長崎の西彼杵、県南、五島の主産地で発生し、収穫期まで多発した。また長崎の春作ジャガイモで葉捲病、Yモザイク病がやや多発し、6～7月および8～9月の多雨のため福岡、佐賀で炭疽病が多発生した。

果樹病害

カンキツそうか病は、4月下旬～5月上旬の多雨のため全般的に多発生であった。果実の発病は春葉からの病菌の持ち込みと6月中旬の多雨によりやや多発であった。また黒点病は梅雨期における果実の前期感染により6月上旬～7月中旬に発生し、さらに8月下旬～10月下旬の後期感染により発生が多かった。かいよう病も春葉で6月上旬～中旬、果実は6月下旬～7月中旬に発病が進み多発生であった。宮崎、鹿児島では、エンドウの褐斑病、褐紋病が4月中旬の高温多雨により多かったためカンキツそばかす病の発生が多かった。カンキツ黄斑病は佐賀、熊本で発生が多く、春先の落葉の原因の一つになっ

た。10月以降の降雨のため立木状態でのカンキツの緑かび病の発生が熊本、鹿児島で発生し、佐賀では早生温州の出荷途上での発生が多かった。ナシでは福岡、大分の一部で花腐れ症が発生した。ブドウ黒痘病は福岡で春季および梅雨期に多発し、開花期前後の高温多湿のため施設ブドウで灰色かび病が多発した。長崎ではビワがんしゅ病が春葉、夏葉ともに平年より多発状態であった。

その他

イ紋枯病は、6月下旬～7月中旬の多雨のため浸冠水した福岡の地帯で収穫時に多発した。甘藷天狗果病が沖縄本島の乾燥地帯、海岸地帯で多発した。サトウキビ黒穂病が沖縄の石垣で、6月に夏植茎に局部的に発生がみられた。

〔 虫 害 〕

昭和47年は異常暖冬で、これが害虫の発生に及ぼす影響が注目されたが、総じて前年と同様に少発生、少被害に終わった。本年特筆すべきことは、沖縄本島で秋季ウリミバエの発生が確認され、これの撲滅および他地域への侵入防止対策が講じられた。

稲・麦

ニカメイガの発生は、局部的には平年並のところもあったが、全体的に発生は少なく、ほとんど防除を必要としない程度であった。反面、福岡・佐賀のクリークに自生しているマコモ寄生のニカメイガは多目であった。サンカメイガは宮崎・鹿児島・沖縄の一部で近年漸増し、分布地域も拡大しており、本年は防除の不徹底もあって被害が多発した。

セジロウンカの7月までの飛来は平年並かやや多く、8月には多目の発生となったが、他害虫の防除により併殺された。トビロウンカの飛来は少なく、坪枯れは10月中旬西海岸に面した地帯でわずかに散見されたに過ぎなかった。ツマグロヨコバイは各地とも越冬密度が高く、幼虫の発育も進み多発が懸念され、その後は近年にない多発となった。その原因として、近年の稚苗、直播栽培の増加、越冬虫の高密度、7月の長雨による防除の不徹底、一部の地方でみられたカーバメート系殺虫剤に対する感受性の

低下などがあげられる。ツマグロヨコバイの多発と相まって萎縮病が多発し、感受性低下のこともあり今後の防除対策に問題を残した。萎縮病と対照的に黄萎病は極めて少なかった。そのほかヒメトビウンカ、縮葉枯病とも近年の少発生が続いている。

コブノメイガは少なかったが、鹿児島県西沿岸部では初発が早く、特に遅植えや多肥田では8月以降被害が目立った。

カメムシ類は平年並かやや多日で、特に中山間地の早植地帯や早期水稻に多かった。主要種はホソハリカメムシ、シラホシカメムシ、クモヘリカメムシ、イネクロカメムシ、ミナミアオカメムシなどである。

麦類の害虫としては、福岡で局部的にヤノハモグリバエがビール麦に多発した。

畑作物・野菜

畑作物害虫は鹿児島で甘しよにナカジロシタバ、沖縄でサトウキビにカンシヤコバネナガカメムシ、カンシヤシンクイハマキが局部的に多かった。また、沖縄ではサトウキビにイワサキクサゼミが初夏に異常発生したが、どの程度の被害があるかは目下不明である。

野菜の害虫は局部的にあるいは季節により多発したものが多かった。佐賀ではタバコガ（ピーマン）、モグリバエ類とシロオビノメイガ（秋作ホウレンソウ）、フキノメイガ（ショウガ）、ヨトウガ（秋作キャベツ）、長崎ではタマナヤガ（夏播ニンジン）、熊本では高冷地にコナガ（十字花科）、大分ではオオタバコガ（トマト）、ウリハムシ（ウリ類）、タマネギバエ（タマネギ、ラッキョウ）、鹿児島ではエンドウハモグリバエ（エンドウ）などであった。沖縄のウリミバエは従来久米島、宮古・八重山群島には発生していたが、9月に本島中・南部で全島の弱（6～7万ha）に発生が確認された。同時に誘引物質による緊急撲滅作業が実施され、本土への侵入防止のため、48年3月よりウリ類、インゲンなどの移出禁止措置がとられた。

果樹・茶

ミカンハダニは春季に多く、夏季は豪雨により少

なかったが、秋季果実の着色期に再び多発した。九州北部ではクリにモモノゴマダラメイガ、南部ではカンキツ類にミカンノミドリヒメヨコバイ（仮称）が多かった。局部的に多発したものは、福岡でチャノキイロアザミウマ（ブドウ）があり、前年に続き発生が多く発生地域も拡大している。熊本ではカンキツ類の果皮を加害するハマキムシ類が目立った。前年多かったヤノネカイガラムシは少発生であった。

茶の害虫はチャノミドリヒメヨコバイ、コカクモンハマキ、春季にカンザワハダニが多かった。

（九州農業試験場 環境第一部）